

續藤栗毛十一編  
上

3巻  
1164  
44





特  
へ13  
1164  
44

序



海野の一人を望み飛出さるるを驚きて驚き入  
喉をつらぬおもひの程のついでに物と紛れ去るよ

十舟の尺四とこし入をよま金品此羅をそよせむ其日の  
浪を度持して遣へり候事次を大海心舟



わらわらちのふくそんを懐くもつとて歌舞  
あはれももつとて果同士のあはれはあはれ  
あはれももつとて果同士のあはれはあはれ



留程もそ程よつとてあも其後を計つて  
 あも人の心をたしあつて被りしれ天玉達つて  
 じつとやうに松久の母のくち中へ只るを  
 やつ子然ども入改痛がさきまゝに山をたて  
 びんよさのしつとれつとて海のもの事ゆも程さる程  
 いしつと入あかして後ふにや西征を  
 ちんせぬ人のよぬゆゑはそしてまゝも此へ  
 雷と地のをそくつとつとせ地を天と入あ

させあふ代官のものさうに所ありやるよまを  
 せをさしあつとてあつとてあつとて  
 何れもそも古きものしつとれを改修の事さるゆ  
 瑞みりあつとてまゝにあつとてあつとてあつとて  
 ちんを同じく金にりしつとれを思ひまゝにさうさる  
 心一編り合き一西毛の續十一編目の口序  
 さもさうさるよ事志す可

乙の改存子甲且 十返舎一丸徳直齋











舌代

膝栗毛當年満尾を積先を越る湯披藤中上御  
 作者勲向を嵩之帖教討之亦古語彫刻懐久之故  
 先例年々通二卷十一編をるし弄中中人来々  
 十二編ゆて全く満尾仕ひ二付し兼る中上通西人清土  
 寢之々麻景奉之内良美入刻切御覽之亦方様  
 呈上仕へ河津流令清御刺宜交を願上作

版元 英盛堂 述

續 膝栗毛 十一編

上册

東都 十返舎 一九編

我傳小枝葉生茂る秋路の松ハちとせ小別焼く  
 て長4巻やせんむらん傳軍茶の始皇ハ巻生の葉  
 を需んとて縁福とて下り下注して金射の山を流  
 きつらまらうを以て皇あして終は得がく。そてち  
 注之林入しちりて帳もこぞ替りもさく此中形人。  
 り長生の子をえんとあふ。價は計り二百銅













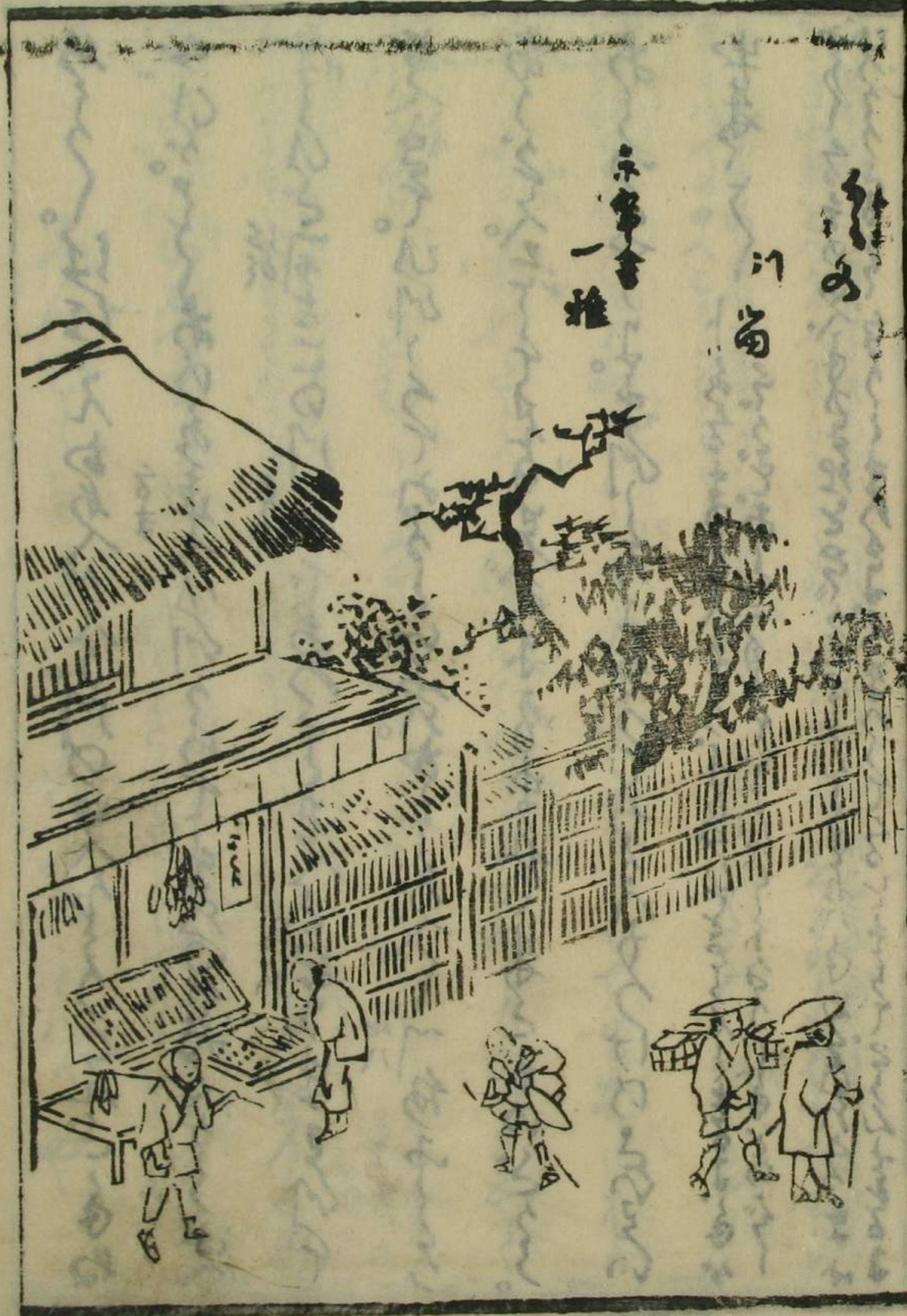


















あゝの車クルマははたしてまじりしと

あゝ あゝ 車クルマははたしてまじりしと あゝ

あゝの車クルマははたしてまじりしと あゝ

あゝの車クルマははたしてまじりしと あゝ

あゝの車クルマははたしてまじりしと あゝ

あゝの車クルマははたしてまじりしと あゝ

あゝの車クルマははたしてまじりしと あゝ

あゝの車クルマははたしてまじりしと あゝ

あゝの車クルマははたしてまじりしと あゝ

あゝの車クルマははたしてまじりしと あゝ

あゝの車クルマははたしてまじりしと あゝ

あゝの車クルマははたしてまじりしと あゝ

あゝの車クルマははたしてまじりしと あゝ

あゝの車クルマははたしてまじりしと あゝ

あゝの車クルマははたしてまじりしと あゝ





































全  
近久庵

酒

鬼

くま

つみえ

まのり

あ

あも

あ



あ

あ

あ

あ

あ

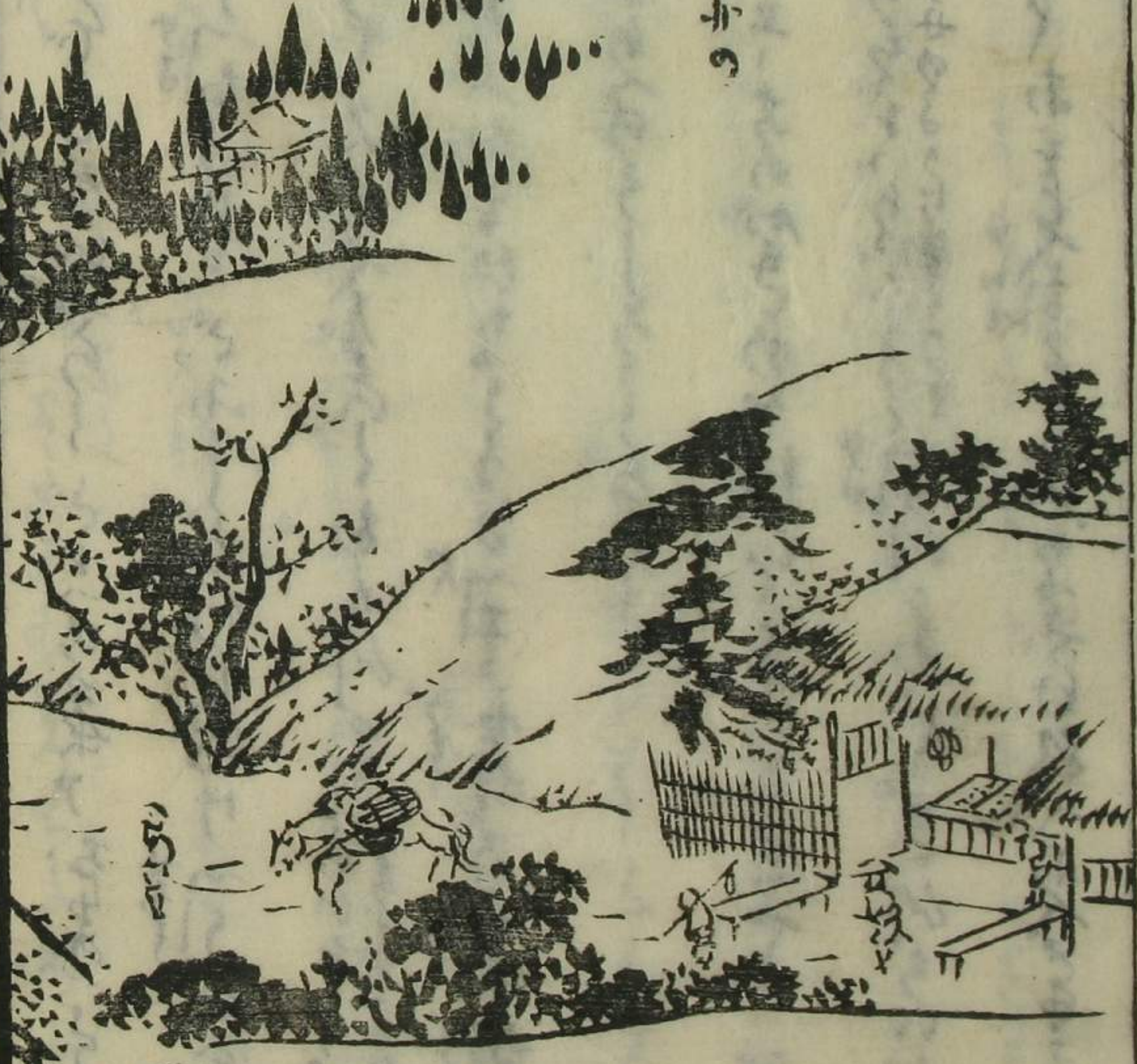
あ

あ

あ

あ

あ













































Two Good Men

me Gujer Pri